

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

賭とバスクススポーツ文化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2005-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹谷, 和之, Taketani, Kazuyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/695

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



賭とバスクスポーツ文化

竹 谷 和 之

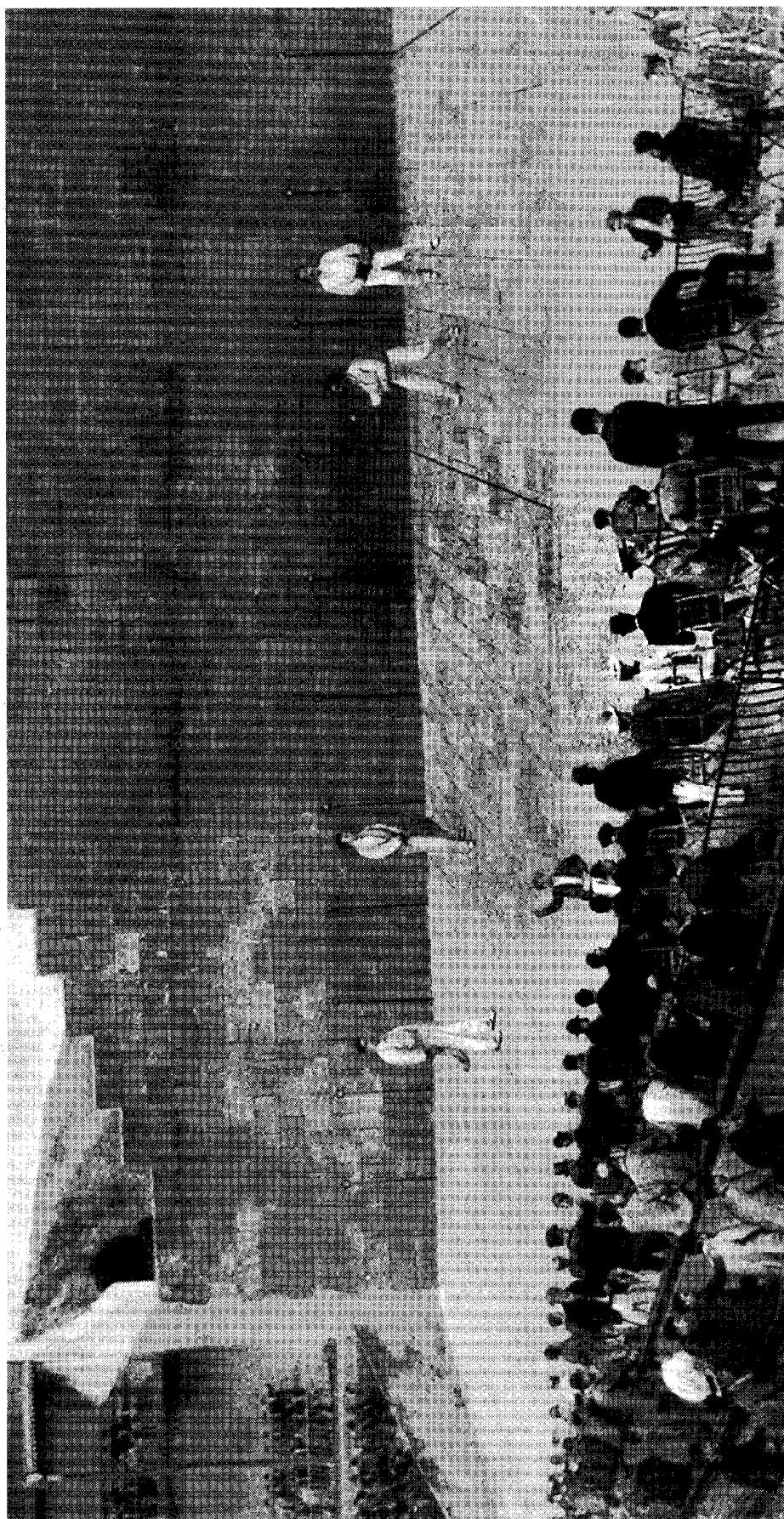
はじめに

ここに一枚の油絵（95×182cm）がある。1887年4月21日、作者不詳。スペイン・バスクの大都市ビルバオに隣接するデウスト市に創られた新フロントン落成記念のペロタ試合である。対戦形式はセスタ⁽¹⁾のダブルスで、当時のスタープレイヤー、バルタサール、ウランガ組とチキート・デ・エイバール、エリセギ組の好カードである。コート（フロントン）上では前衛によって今まさにサーブがなされようとしており、その他のプレイヤーはボールの行方を見守っている。これは19世紀後半の最新のコート状況であり、コートは絵の右側に前壁 frontis、そして正面奥に左壁があり一定の間隔で壁にマークが付けられている。これはサーブのエリアを決定する場合に用いられたり、種目の異なるペロタゲームにも使用される。この時期にはすでにゲーム分化の形跡がある。

高所から見下ろすように描かれた前景には特別席と一般席が区別されており、そのほとんどが男性で占められている。特別席の男女の服装と一般席のそれからは階級の存在が確認できる。左後方にはバルコニーと地上席にぎっしり埋まっている観客、それに額縁からはみ出る観客を想像するとかなりの人びとがこの試合を見に来ていることになる。

プレーの特徴は、ワンバウンドないしはノーバウンドで受けたボールを、

図 ペロタ・セスタの試合



対戦相手が交互に前壁へノーバウンドで返球することである。その際、左壁近くのボール処理が勝敗を左右する。ボールをワンバウンド以内で受けることが出来なかつたり、前壁に当たったボールがノーバウンドで直接コート外に出ると失点になる。右手にはめられたセスタ（籠製のグローブ）のカーブを利用したスピード感溢れるゲームが展開されたことであろう。

ここで、有名なプレイヤーには申し訳ないが、観客の最前列でプレイヤーに背を向け、ベレー帽を被り右手を挙げている2人の人物に注目していただきたい。彼らはコレドール *corredor* という賭の仲介人である。試合中に観客と観客の賭を請け負う第三者である。右側にいるコレドールは賭値の交渉をしているのであろうか、夫婦とおぼしきカップルと話している。一方左側のコレドールは左手を高く差し上げ賭を募っていると思われる。19世紀後半のこの光景は現在でも見ることができる。したがって、このような好カードであれば多くのコレドールが登場し、多額の賭の仲介をしたことであろう。

（2）
バスク民族に伝承されているペロタは賭の代名詞として知られている。つまりペロタと賭は不可分の関係にある。日本の近代スポーツ觀には賭は負のイメージとして定着しているが、民族スポーツの場合、賭=スポーツであるという例をあげると枚挙にいとまがない。しかしひペロタは数多くあるバスク・スポーツの中でも特別な位置にある。これはバスク人居住地域からスペイン国内はもとより、隣国フランス、さらに中南米、アフリカ、東南アジアにまで普及していることからも窺える。つまり民族スポーツが展開される閉じられた社会だけでなく、広く世界20の国でプレーされているのである。

本論では、このように賭と密接な関係にあるペロタについて、他のバスク・スポーツも視野に入れながら、その伝承母胎であるバスク社会の中でどのようにシステム化されていったのかを考察する。

I. バスクについて

バスクはヨーロッパで特異なエスニック・グループとして絶えず話題になっているものの、断片的な情報が幅をきかせ知識階級の間でもあまり理解されていない。まずバスクの地理的範囲であるが、ピレネー山脈を挟んでスペイン4県（アラバ、ギプスコア、ビスカヤ、ナバラ各県）とフランス3地方（ラブール、低ナバラ、スール）となっている。このフランス3地方という表現は、アンシャン・レジーム期の行政区分である。現在フランスの新区分では、バスクの範囲が相当広くなり不十分とされているからである。

このバスクの地理的定義はほぼ異論の余地なく定着している。また、山バスク、海バスクといわれるような区分がなされてきたが、これは生業形態に依拠した区分であり、この他に里に居住して政治や商業に携わる里バスクの人々もいたことが判明している。このようにバスクについての説明はある程度確定しており、そこから抜け出すことはなかなか困難である。例えば、民族の言葉としてのバスク語。ヨーロッパで使用される言語との関連は全く見いだされず、言語島をなしていること。語順はむしろ日本語に近い。次に、血液型。O型でRHマイナスが多いことから、外部との接触が少なかったのではないかという仮説を立てられている。三つ目に出自。形質人類学で骨格の特徴から判断されるに、クロマニヨン人直系とされている。これらの特徴をある程度裏付けた研究者の代表としてミケール・デ・バランディアラン（1890～1991）を指摘できよう。かれの視点は、バスク人とは何か、バスク伝統とは何か、その内実は何かという従来の言説に対する疑問の解明であった。バスク研究の基礎は彼やバスク研究会（Etniker⁽⁴⁾）の地道な研究なしには成立しえなかつたと言っても過言ではないであろう。バランディアランを中心とした研究グループは、考古学から聞き取り調査まで現在でも精力的な活動を続けており、その成果は高く評価されている。

以上三つの代表的な特徴（言語、血液型、出自）に加えて、一般的に神話、

舞踊、スポーツ、音楽などが列挙され、これらに民族色を前面に押し立てた説明が付加される。さらに、わが国ではバスク民族独立に絡む政治展開やテロリズム報道がメディアを賑わせている。また、歴史上の人物として、キリスト教布教で来日したフランシスコ・ザビエル、そのザビエルに影響を与えたイエズス会始祖イグナチウス・デ・ロヨラ、マゼランの世界一周を引き継いだエル・カノ船長。歴史ではスペイン人として記述されているが、詳細を検討していくとバスク人の活躍が目覚ましいのである。そして、ピカソの描いた「ゲルニカ」。ドイツ空軍の爆撃によるゲルニカ村の惨劇を、当時パリで計画されていた万国博覧会のスペイン館正面入り口の作品として描きあげた。最後にベレー帽はバスク発祥とされている。

これらは確かにバスクの要素ではあるが、バスクを「語る」ことにはならない。クリフォード・ギアーツの言う「文化を書く」には多くの問題を抱えることになる。⁽⁵⁾しかしそのことを踏まえた上で、バスク・スポーツと賭を通してバスク社会を捉えると、バスク人の行動のダイナミズムが見えてくる。

II. バスク語とスポーツ

バスクスポーツの名称に賭がそのまま使用されている例がある：石引き（牛）idi-dema, idi=牛, dema=賭。草刈り sega apustua, sega=草, apustua=賭。これらの名称がいつ頃から使用されたのかは確認できないが、バスク語での表記に注目したい。フランコ独裁（1939～75）⁽⁶⁾がもたらしたバスク語禁止令はバスク社会に多大な影響を与えた。公文書などの使用言語は統一スペイン語になり、バスク社会からバスク語が消滅していった。もちろんスポーツ名も影響を受け、すべてスペイン語に差し替えられた。先の石引きは arrastre de piedra por buyes（牛の石引き）、草刈りは corte de hierba（草の刈り取り）とスペイン語表記になった。フランコ死後のバスク語は復権したが、使用禁止が長期間に及んだ影響は多大で、バスク語を話せ

ないバスク人が多数を占めかつ広範囲にわたった。現在でも、文化より流通経済を優先した結果、社会言語としてバスク語のみでは成立し得なくなっている。

III. はじまりとしての賭

バスク人はすぐれて賭好きといわれている。フランコによれば、バスク人はつい最近まで、スポーツ以外で賭の楽しみがなかったという。⁽⁷⁾つい最近とは20世紀半ばと解してよい。これは資料などで確認できる範囲であろう。口承社会であったバスクには文字資料が残されておらず、即興詩（ペルソラリスモ）⁽⁸⁾などで今に伝えられている。バスク・スポーツの賭の形式は力強さ、敏捷性、技巧、持久力などの試合でもある。例えば、丸太切りは規定の丸太を早く割った者が勝者という単純明快な賭である。ここには二者間の賭というもっとも原型に近い勝負がある。この場合は名誉が先行し、賭けの賞品は二次的である。

この名誉観念はカセリオ caserío (バスク語ではバセリ baserri) というバスク特有の農家と密接な関係がある。ガブリエル・アレスティは『石と村 (Harri eta Herri)⁽⁹⁾』でその本質を的確に詩に表している。拙訳にて紹介してみよう。

守り抜く
父の家を。
オオカミや,
日照り,
高利貸しや,
裁きに対して,
守り通す 父の家を。

家畜や,
農園,
松林が なくなるかもしれない,
財産や,
収入,
配当も なくなるかもしれない,
しかし父の家を 守り抜く。

軍隊が強奪しようものなら,
この手で父の家を守り抜く;
手を切られても,
腕で父の家を守り抜く:
腕が無くとも
肩, そして胸が無くとも,
魂で父の家を 守り通す。
わたしが死に,
魂が失せ,
子を亡くしても,
父の家はそこにある。(pp.52-54)

この詩には、「家」や「伝統」を尊重するバスク人の心性が見事に表現されている。カセリオを営んでいくには共同体ではなく、家族の協力が不可欠である。それゆえ子供は労働力として貴重な存在であり、幼少から仕事を手伝った。しかしバスク特有の相続制度ゆえに、家督の相続は一人に限定された。バスクでは財産分配はもっとも恥ずかしいこととされる。それ以外の子供は家を出していくか、または独身で家に残った。それゆえ大航海時代以降、アメリカ大陸などには移民として多くのバスク人が住み着いたのである。

バスケでカセリオを建てるときには家に名前が付けられる。玄関の扉の上方にその名前が刻まれる。300年も続き今なお大事に使用されている家には、土地の名前、職種、最初の家主の名前などが見られる。例えば、Mendialdea 「山の方」、Oihanbidea 「森の道」、Aroztegia 「鍛冶屋」、Dendariarena 「裁縫師」、Perurena 「ペドロの家」などである。数世代にわたって有名なペロタ選手であった Atano は「小さい扉」という意味である。それほど家に対する想いは深く、強い。このように「家」に対する考えが強烈であればあるほど、名誉観念も同様に不動であった。したがって、家の名誉をかけて闘われるバスクスポーツでは、競技者に重圧がかかるのである。

名誉を賭けるとはどのようなものか。それは例えば、前近代スポーツに見られるイギリスの名誉観念とは質を異にしているといえよう。⁽¹⁰⁾ ブラッディ・スポーツに⁽¹¹⁾ 繙承されている「いかなる苦痛や死に直面しても、なお最善を尽くして闘いぬく「男らしさ・勇気・忍耐」」ではなく、労働の延長として、さらには労働力（仕事量）を披露する場として、日常生活に影響を及ぼす「生」の闘いなのである。イギリスの場合はその多くは観客側から与えられた視点であり、それに基づいて「名誉の観念」が維持されていたのである。しかしバスクの場合は、競技者も観客も近隣農家の住人である。司馬遼太郎をして言わしめているように、バスク・スポーツの本質は労働である：

「バスク人は本来木こりであり、農民であり、羊を追う人であるために、男は体力が最大の価値とされる。(中略)」

よき木こりや炭焼きであるためには、若いころの木割り競争で鍛えておかねばならないのである。よき戦士であることとつながりのあるギリシア以来のスポーツや、よき貴族するために運動神経や統率力、状況判断力をやしなうイギリスのスポーツとは、「どうやら根のほうでちがっている」(街道をゆく22 - 南蛮のみち I, 朝日新聞社, p.304.)

そのカセリオ間の賭を映像で表現されている作品がある。バカス vacas (雌牛) と題するこのスペイン映画(1991)は、フリオ・メデム監督が山バスクに住む三世代の生活を雌牛の目を通して描く。牛の目という他者に普遍性をもたせ、バスク人の生き様を冷静に追う。その映画は、単調なカセリオの生活を祝祭にする斧の賭試合から始まる。今でいう丸太切りは高額な金はもちろんのこと、対戦する両家の威信がかかっている。それぞれに期待された男たちは全力を出し切るが、試合が終わると歓喜と落胆にかわる。さらに敗者の妹は勝者に想いを寄せ、未婚の母となる。その息子は勝者の娘と恋に落ちていく……。二つの戦争（カルリスト戦争とスペイン市民戦争）の間に生じたこの山間部の出来事は、長いバスク史のほんの一コマでしかない。このシンボライズされた映像にはバスク・スポーツと賭、そして人々の名誉が凝縮されている。ここでは労働がスポーツになるとき、賭として始まるのである。

このカセリオの人々の声を、アレスティはまた次のように詠む：

賭は金儲けなもんか,
アシュラール爺さんは言った。
金持ちに
よう話したわい,
われら貧乏人には
錢などない
賭はわれらの
最後の望みなんだ, と。
村の長おきはそう言った。(p.72)

この「望み」と言わしめる状況がバスクには長く続いていたことをうかがわせる。つまり望み=賭こそがバスク精神を形成する源であり、単調な日常

労働を耐えうる力を発揮させたのであろう。それほど賭はバスク人に受け入れられていたのである。

これらが山バスクの典型的状況であれば、里バスクはどうであろう。労働としてのスポーツは広場などで行われることはしばしばある。しかしひペロタほど環境が整えられているスポーツはほかに見あたらない。これは山バスクのスポーツであったが、牧人の生活形態が変化するにつれコートが里へと降りてき、村人にも徐々に浸透していったのである。現在はコートであるプラサやフロントンはどの村に行っても簡単に見つけることができる。フランス・バスクでは教会と墓、それにこのフロントンというコートが隣接しており、バスク農村の典型的風景を形成している。このコートで、幼少の頃から「英雄」に憧れ、子供たちは素手でボールを打って遊ぶ。そこでは堅いボールを打てることが村の中で存在感を主張できるようになる。そして遠くへボールを打つことが無言の優劣を表す。そうなれば、子供は時間があればフロントンに集まりボールを打ち合うのである。大人は休日などに試合を始め、それを観戦しに村人がフロントンに集まってくる。かくしてスペクタクルが村人をして結合させる。ペロタにはそのような魅力が内在しているのである。

IV. ペロタの概要

1. バスク・スポーツにおけるペロタの位置

四国を一回り程大きくした地域に数多くのバスクスポーツが伝承されている。この数の多さはバスクナショナリズムと関連があるとするマックランシーより⁽¹²⁾の言説はそれほど唐突な発言ではないと思われる。サビーノ・アラナ・ゴイリ⁽¹³⁾がバスク語文法を出した頃には、バスク文化の危機が声高に語られ始めていた。そこにはバスク語社会へのスペイン語の普及という事態が介入してきたからである。文化保護を唱えた人々以外は、生活必需言語として統一スペイン語を使用していった。また、バスク外の移民による社会も出現していた

のである。そこで、バスク文化の源をなす神話、信仰、いわゆる出自に関する「真実」の収集に力を注がれた。こうして18世紀後半には「神話の創作」⁽¹⁴⁾でバスクの再構成が行われた。そこでは当然ゲームやスポーツも取り込まれた。それまであまり関心を示されなかった遊戯までも「土着の」というカテゴリーに入れられていった。伝統にこだわるバスク人は、「バスク」に関わりのあるものはすべて取り上げ、「土着の」「土着化されたもの」をすべてこの範疇に入れたのである。しかし20世紀はじめにバスク学会が創設されて、これまでの動向に対する反省から「バスクとは何か」という問題設定が掲げられ、検証され始めたのである。

バスク・スポーツの一つであるペロタは資料では確認できないほど古くから実施されてきているボールゲームである。しかし、起源がバスクなのか、それとも外来文化なのかは明確ではない。テニス球戯史研究の第一人者であるギルマイスターによれば、フランスから伝播し定着した「土着化した」ボーラーゲームであるという。しかしその仮説への有効な反論が出てきており、⁽¹⁵⁾ 詳細はそちらを参照していただきたい。

バスク・スポーツの起源

現在のバスクスポーツの種類は大きく3つのカテゴリーに分けられる⁽¹⁶⁾：

①労働起源

日常労働が起源とされているスポーツである。本来の仕事から離れ、スポーツのジャンルに定着するのはごく最近である。それまでは、労働者間での娯楽や遊びとして特別な意識を持たずに行われていた。競技名として、丸太切り（地面に寝かして設置された規定数の丸太を切る）、石かつぎ（規定時間内に何回担ぎ上げるかを競う）、石引き（牛による競技は、30分で28メートルを何回往復できるかを競う。人、馬、ロバなどによる競技もある）、草刈り（1時間で刈り上げる草の量を競う）、綱引（屋内・屋外の2種目。国際

規定と同じ), 錘運び(片手それぞれに錘(50~100キログラム)を持ち, 運ぶ距離を競う), 金敷上げ(身長より45センチメートル高い所に設置された板と地面に, 鍛冶屋で使用される金敷(30キログラム)を1分半で往復回数を競う), トウモロコシ拾い(カゴから等間隔に遠くへ置かれた12本のトウモロコシを1本ずつカゴに回収する), 荷車運び(重さ60キログラムの荷車の接続部の端を地面に固定し, 持ち上げておろすまで円を描くように移動距離を競う), キビ袋担ぎ競走(80キログラムのキビ袋を肩に担ぎ, 120メートルを3人でリレーする), 大鋸切り(板きれ10枚を2人で早く切る競技), 薫束上げ(重さ40キログラムの薰束を, 高さ4.5メートルまで1分間に上げる回数を競う), などである。ほとんど廃れてしまったものとして, 穴あけ, 鋤競技がある。

単調な労働を賭に変えていくプロセスがこの種目数で想像できる。この楽しみが賭なのである。

②戦闘起源

筆者はバスクスポートすべてが闘いの準備としての性格を有すると考えるが, ここに該当する種目は後年の基準で区別されていると思われる。

バラ(10キログラムの鉄棒を助走をつけずに投げる), クレー射撃(投げられた皿を撃つ), 競走(初期の頃は100キロメートル離れたスタートとゴールのみを指定され, アクセスは各自で選べた時代があったが, 近年は闘牛場での30キロメートル程度の長距離走である), (動物の) 競走などである。

③宗教・遊戯起源

ここにはペロタ, 九柱戯などが含まれる。ただ, ペロタの起源はヨーロッパ全土に普及しているボールゲームとの関連を指摘されているが, その決定的な位置づけがなされていない。今でこそ国境が確定され, それぞれのお国柄として民族文化がまことしやかに語られるが, 以前は人の移動とともに文

化も持ち込まれて楽しまれていたのである。文化伝播、文化複合などで定着していくケースがほとんどであった。

しかしバスク独自のスポーツと言われる所以は、今では他の地域や民族に残存していない素手のゲームや、用具の改良などで多種のゲームが見られることがある。

この範疇には、九柱戯（ボウルを2回に分けて投げ、9本のピンを多く倒す競技。ボウルやピンの種類は多数ある）、トカ（15メートル離れた所に鉄の棒を立て、そこにコインを投げて当てる競技）、闘羊（牝羊を奪い合う牡羊の闘争本能を利用した競技で、頭突きで相手の戦意が無くなるまで行う）、闘鶏（足に刃物を取り付け、相手が動けなくなるまで闘う）、「ガチョウ」（ロープに足をくくりつけられたガチョウの首にしがみつき、ロープの上下で水面にたたきつけられる回数を競う。首がちぎれるまで続けられる）、そしてペロタがここに含まれる。

宗教・遊戯との関連では、ペロタがかつてのピレネー山中の太陽信仰と深いつながりがあるとする説や、外来文化としてのボールゲームがバスクに伝播したという説とが混交している。これを解きほどくにはヨーロッパ全域を視野に入れたボールゲーム研究が必要になる。それに関しては今後の研究に委ねたい。

2. ペロタの概要

ペロタ pelota はスペイン語であり、ボール、球戯、球などを意味し、バスク語ではピロタ pilota と発音される。ペロ pelo は毛であり、-ta は小さいことを表す縮小辞で、かつては犬や羊の毛を丸めた小さなボール（詰め球）で遊んでいたとされる。スペイン初の西西辞典（別名コバルビアス宝典、1611年刊）にも同様の説明が見られる。⁽¹⁷⁾ この球戯はバスク地方以外にも「ペロタ」の名で普及しており、ここで取り上げるバスク地方のペロタはしたがってペロタ・バスカ pelota vasca である。バレンシア地方やカナリア諸島で

プレーされているボールゲームと区別するために特定地域の形容が付加されている。

一口にペロタと言っても現在28種目の形態を確認することができるのである。一つひとつ説明することはできないが、大枠について説明してみよう。

(1) ペロタのコートについて

コートは3種類ある。プラサ plaza, フロントン frontón, トリンケテ trinquete および回廊 arkupe である。しかし回廊は、教会や建物の庇の下にあり、近年あまり使用されなくなっている。したがってそれを除いた3種類で行うのが一般的である。

①プラサ

一定の広さ(最小は16×70メートル)が必要なので村の中央に位置し、普段は誰でもそこで遊ぶことができる。そしてペロタだけでなく年間を通じて様々な催しが行われる。かつては土を堅く踏み固めイレギュラーしないように手入れされていたが、近年は石やコンクリート舗装が一般的である。フランスバスクではペロタ専用のプラサがあり、塀で仕切られているところもある。おもに広場の中央をセンターラインに見立て、対面でプレーが行われる。このプラサに前壁を設置して次に述べるフロントンに変化していくのである。

②フロントン

フロンティス frontís というボールを返球するための前壁が備えてあるコートである。この壁に返球する形態は一般にブレ blé と呼ばれ、19世紀半ば頃にバスクで普及し始めたといわれている。フロントンの初期は屋外であったが、次第に屋根を付け、屋内コートへと変化していった。これは囲い込みなどによる入場料徴収とも関係ある。つまり、プロの登場とともに興行スポーツの進展と関係が深い。

前壁に左壁が付加されていくのも19世紀である。これはボールの改良と深く関係している。左壁ができたことに関して資料は沈黙しているが、かつては毛を詰めたあまり弾性のないボールであったが、芯、ゴム、ラテックス、糸、綿などで硬球（巻き球）にされてからはコート外へ出るようになり左壁が用意されたと考えられる。さらに用具の開発とともに弾性はさらに増加し、後壁が必要になった。右側は唯一観客席である。ボールスピードが速い場合は、コートと観客席との間に防護ネットを張りボールの飛び込みに対処されている。

③トリンケテ

屋内コートであり、四方をコンクリートの壁に囲まれている。中にはペントハウスを取り付けているコートもあり、その下にはギャラリーという窓がしつらえられている。いわゆるジュ・ド・ポーム *jue de paume* の一種であるクルト・ポーム *courte paume* のコートと言えよう。クルト・ポームは施設の管理運営および高価な手製ボールもなどを考慮すると、貴族階級や上流階級の人びとの所有であったといえよう。一方、屋外で行うロング・ポームは様々な階級が入り混じっていた。このトリンケテ・コートに関する限りペロタとポームは同時代のスポーツであったと言ってよい。なぜトリンケットという名称になったのかは定説がなく、ギリシア時代の *tripot* にまで遡つて説明がなされる場合もある。*tri* という「3」に関わる数が何に対応しているのかが初期のコートと関係で重要なポイントである。

V. ペロタと賭

ペロタ試合で賭が行われていたことを報告するものとして、イスツエタ Iztueta の『ギプスコア史』⁽¹⁸⁾ から引用してみよう：

「ギプスコアの農民たちはズボンのポケットに8ドゥカードを密かに隠し持って、陽気に、着飾って賭試合に出かける。仕事で汗を流すことが精一杯であるにもかかわらず、気ままに5ドゥカード、10ドゥカードを、最高は20ドゥカードまで賭けている。金のない者は牛、ラバ、馬、山羊、羊などの家畜を試合に賭ける。彼らは巣廻の人物に、あるいはプレイヤーが身につけている上着やベルトの色に賭けるのを私たちは目撃した。」

「エルナニの広場で、4人のギプスコア人と4人のナバラ人とのペロタ試合では、試合が終了するまで、隣接する並木に、シーツ、布団やマットが寝台とともに吊されてあった。村の男たちの取り決めにしたがって賭けられたものである。このような試合は1720年頃であったといわれている。」

賭には必ずもめ事が起こる。そのためには主催する村の人達が主導権を握る。これは賭金が大きければ大きいほど効力を發揮するのである。しかしそれでも争いは絶えず生じた。

その好例が、メリメ作『カルメン』に描かれている。メリメが生きた時代はイツツエタのそれと多少ずれるが、それほど大差はなかったと思われる。主人公ドン・ホセはバスクに現存するエリソンド村出身で、ペロタ試合で殺人を犯してしまう。その結果、村を追われ軍隊に入りカルメンと出会う。ペロタ試合で殺人が起こる原因としては、次の二つが考えられる：金銭または名誉。ドン・ホセはナバラ人、相手はバスクのアラバ人である。『カルメン』にはもめ事の詳細は書かれていないが、この二つが関係しているのは明白であろう。

また、聖職者とペロタの賭試合の関係も興味深い。

ナバラ県の都パンプローナにある教会古文書室には教会に関する記録が保存されている。その中に、スポーツ、遊び、舞踊、バスク語の使用など当時

の社会としては違法行為とみなされる判決文が見られるのである。年に数回、主な教区を定期的にまわる地方巡察官による判決である。

ペロタに関して最も古い1588年の内容は、聖職者の賭ペロタへの判決文である。僧の階級は多岐にわたるが、この判決に登場する聖職者は下位の僧である。この裁判に至るまでには数回注意を受けており、目に余る者を対象として処罰をしたものである。司祭はドン・ペドロ、ドン・ファン、ドン・マルティン、ドン・サンチョ、ドン・ベルナルドおよびドン・ファン・デ・エチェテギの6名である。彼らは司祭、鐘楼係、病院勤務などの職務についていた。ことの起りは、彼らの一方がペロタ試合(3対3)の判定に不服を言いたて、口論となり、殴打にまで発展した。このとき司祭服のスタタンや上着を脱ぎ、胴衣と半ズボンで試合をしていた。最終的には賭の支払いが拒否された。この噂が広がり教会側となっては無視できない状況となったのである。判決は、訓諭とそれぞれの教会で数日間、午前と午後数時間の隔離部屋入りとなつた。⁽¹⁹⁾

もともと司教とは、教区を管理しながら布教活動を行う。しかし、司祭を含めて僧になつてもいわゆる俗人と変わらない人々の管理・教育が必要なのである。この事例から当時の僧侶の出自が推測される。

これは氷山の一角にすぎないであろう。何度も注意されて、それにも関わらず賭試合をし、一般人にとって目に余る失態を演じた。教会側にとっては権威失墜に直結する出来事であるが、逆にこれこそペロタの持つ魅力ではないか。僧職に就く以前の感覚でもってゲームをしたことは、かなり頻繁に試合が行われていたことを推測させるのである。彼らは賭試合の醍醐味から抜け出せなかつたのである。それゆえ教令 Constituciones で聖職者のあるまじき行為について規定がなされたのである。

VI. バスクスポーツの近代化

常にバスクスポーツと賭が緊密な関係にあったことはすでに述べた。ここではこれらの密接な関係が、当局によって管理されていく過程を見ることがある。これは近代的思考と直結しており、19世紀後半に顕著になる。

1. ペロタの近代化過程

二者間の賭が問題になったのは、試合の判定や結果に対する抗議、喧嘩、紛争から暴動へと発展していき社会不安を引き起こしたからである。事実、多くの不正や八百長などが露呈し、無視しえない存在になった。この問題解決の方法として、バスクの公的機関が関与し、管理し始めたのである。1886年ギプスコア市議会はスポーツに関する通達を公布し、すべての賭や競技会は許可を必要とした。1889年、企業家イリバルネの主導によりサン・セバスティアン市において、ペロタの賭をコレドール（仲介人）に任せる初めての試合が行われた。この迅速な対応は、逆にそれまでの試合が多くの問題を孕んでいたことを物語っている。その後、1895～1917年にギプスコア県で通達が整備され、各県に浸透していった。その結果、これまで試合に欠落していた当局の望む「真面目さ」が改善されたのである。そして1943年8月20日に「プロの丸太切り、石かつぎ及び草刈りにおける規定」が公布された。この規定の実施と管理は、競技運営の経験がある陸上競技連盟に委ねられた。この3種のバスクスポーツはフィールド種目としてつまり「純粋なスポーツ＝近代スポーツ」として公的に認められたのである。⁽²⁰⁾

その30年余り後の1976年には「バスクの遊戯・スポーツ」独自の全体会議がアギーレ・フランコ氏を中心に立ち上げられた。そして1979年6月「バスク遊戯・スポーツ連盟」が設立された。バスク地方全域にネットワークを張り巡らせ、独自の運営を手がけることになったのである。現在では、バスク遊戯・スポーツは陸上競技、バスケットボールなど近代スポーツと同様の位

置づけがなされ、スペインバスケットでは一つの連盟を組織するまでに至っているのである。

しかしひペロタ連盟は別の行動をとったのである。19世紀後半のギプスコア県議会通達の整備が一段落つく頃に、ペロタ連盟の組織化が行われる。1921年フランスペロタ連盟、1925年スペインペロタ連盟、1929年国際ペロタ連盟が次々と組織化された。そして連盟設立と同時に賭の規定も成文化されるのである。最初の規定は69ヶ条から成っており、内訳は仲介人について、賭について、および勝ち抜き戦についてである。第25条には賭の種類が明記されており、開始前の賭のみ、試合途中及び開始前の賭の2種類があった。これは現在でも変化していない。

賭の成文化は連盟にとって資金調達を容易にさせる。一方で資金を競技施設に還元することで、維持管理が継続的になる。賭の条文にそれが明記されている：

第20条 賭試合の実施はスペイン・ペロタ連盟に賭金の1パーセントを収入として納められる。賭金の総額はスペイン・スポーツ連盟と国際オリンピック委員会により定期的に示される。これはスポーツ一般、およびとくにペロタの促進を目的とする。

また、誰でもが賭に参加できるとは限らない。第23条に「年少者の賭は禁止、または責任能力のないと見なされる者は除外される」とある。年少者は18才未満と考えてよい。

現在は、賭の勝者は仲介人に16~18パーセントの手数料を支払わなければならぬ。このパーセンテージはペロタ試合の実施場所つまり競技場の「格」に関係している。重要な試合ができるかどうか、収容できる観客数などが勘案される。

それほどまでにペロタは普及していたことを示している。バスクから外国への普及、とくにアメリカ大陸へ持ち込みは、バスククラブというバスク人専用の施設や人のネットワークを作り出し、祖国バスクの文化保護の中心的役割を果たしたのである。これはバスクの家父長制が直接的間接的に移民としての意欲を刺激し、スポーツ文化そのものがアイデンティティの確認、さらには安らぎの拠り所としての機能を發揮していた。⁽²¹⁾

また、1924年パリオリンピックでペロタのエキシビション競技が実施され、オリンピック種目への「昇格」がアピールされた。その後、1968年メキシコ、1992年バルセロナと合計3度のオリンピックに登場したが果たすことはできなかった。競技地域の限定性ゆえに現在でも地域スポーツ種目から脱皮できていないのである。ワールドゲームズに登録はしているものの、フロントンなどの競技施設の建設に費用がかかり、開催都市がペロタ・コートを保持していることが条件となる。

2. ペロタの賭と現状

ペロタで実施されている賭は3種類ある。これらは全てコートがある施設内で取り扱われ、わが国のように「場外券売場」といった特別施設は用意されていない。ただ最近になって、インターネットで賭ができるようになった。それらを順次見ていくことにしよう。賭の単位はドゥーロduro（5ペセタ硬化の意）で表現される。

①コレドールによる賭(Apuesta normal del corredor)

この形式がもっとも一般的である。この賭の形式は試合に出場する選手に賭けるという単純なものである。コレドール(corredor=仲介人)が賭をしたい観客の賭金を取り持ち、その賭けに応じる観客を捜す役目を請け負う。しかし特徴的なのは、試合が始まり時間が経過しても賭が中断されない

ことである。申し出のあった掛け金に対抗する観客が現れない場合は、同額の掛け金を自由に変化させて減額し射幸心を煽る。金額だけを簡素化したコレドールの声がコート上に響き渡り、熱戦であればあるほど相乗効果をもたらす。賭が成立すれば、その時の金額が書かれた紙片を渡し、次の仕事を探すことになる。コレドールはスペインペロタ連盟の許可証を保持しており、金銭トラブルが生じないように徹底されている。彼らの仕事は賭の成立の仲介をスムーズに行い、それも数多くの賭を成立させることにある。最終的に成立させた金額の数パーセントがペロタ連盟の収入となる。

②試合開始前の賭 Apuesta mutua

ペロタ試合が始まる前に勝者を予想する賭をいう。つまり、2者のどちらかに賭けられ、試合終了後、敗者に賭けられた総額を勝者に賭けた人びとの間で分配するのである。

③勝ち抜きの賭 Quiniela

この賭は勝者とユニフォームの色を予想することにある。この賭の形式に登場する試合は上の2種とはかなり形式をことにしている。これは勝ち抜き戦である。シングルス、ダブルスおよびトリプルスの3種類あり、5人／5組以上の参加でゲームが成立する。背中に参加番号を付けた選手のうち、まず2人／2組が対戦する。その間、残りの人は待機場で出番を待つ。勝てば1ポイント獲得でき、敗者は待機場へ移動し、出番待ちの選手の最後尾に並ぶ。勝ち残った選手はその場に居残り、新たな選手とプレーする。このように勝ち抜く毎に得点が加算され、規定のポイント（競技者／組より1ポイント少ない数）獲得した選手／組が優勝である。途中で負けてもポイントは保持することができ、次の順番の時にはそのポイントに加算されるようになっている。

VII. バスクスポーツと賭の変容

バスクスポーツの始まりは二者間の賭であった。それを疑うことすらせず容認されていた時代から近代合理主義的管理へと統合されていく過程は、フーコーが指摘した「従順な身体」と同様、他者に委ねることとなった。近代システムにいとも簡単に組み込まれていったのである。このことから想起されるのは、バスク地域信仰がキリスト教に、またバスク自治を外部勢力との関係改善でとられた選択である。前者の例として、ギプスコア県とビスカヤ県の県境にあるマルキナーシェメインの教会を指摘できよう。大きな3つの石を教会がそのまま覆うように建てられている。石信仰はヨーロッパをはじめ世界各地に見られる現象であるが、バスクも例外ではなく、バスク人の信仰をキリスト教に向かわせるための装置と化したのである。後者の政治的勢力関係は、ローマ時代からフランコ独裁時代まで常に緊張を強いられてきた。そこには少数民族ゆえの譲歩、それも存続をかけたぎりぎりの譲歩が提示されたのである。このようにして限られた選択肢の中から常に生き残りをかけて工夫を凝らしてきた。賭の残存はその代表例である。

賭に対する思考は、はじめに現前していたものを肯定した存続の模索である。しかし、バスク社会に多数の外部の人々が入り込み、価値基準がぐらつき始めた。いわゆる「伝統」が崩壊し始めたのである。崩壊を成立せしめた基準には、当局による規範が中心を占め、その強制が浸透していったのである。これにともない社会の慣習を修正せざるを得なくなったどころか、娯楽の画一化へ歩みだしたのである。バスク・スポーツの本質であった賭は、近代社会の価値基準に呑み込まれ、地方議会や各連盟などの管理下に置かれたのである。

しかし賭は残された。観客の側からは、賭のない試合など考えられないという声が聞かれる一方で、近代思考の中で育ってきたバスクの若者には賭に対するこだわりは全くない。この価値の共存がバスクスポーツを成立せしめ

ているのである。さらに、賭を罪悪視せず、個人の選択に委ねられている社会的寛容さも見過ごしてはならない。

註記および引用文献

- (1) 野山で摘んだ果実を入れる籠（素材は籐または柳）から派生したといわれている。細長く、ボールが転がるようにカーブしている。これを右手に紐で固定してボールの捕・投を行う。野球のようにボールを打突するのではなく、セスタで受けながらカーブを利用して投げるという身体技法が必要である。
- (2) 世界各地に散ったバスク人が持ち込んだペロタは、賭があるからこそ受容されたといえるであろう。かつては上海、マカオなどで、現在はスペイン、フランスをはじめフィリピン、アメリカ・ネバダ、マイアミなどのカジノで賭とともに共存している。
- (3) ペロタ・バスカ連盟は以下の通りである；アルゼンチン、ベリギー、ボリビア、ブラジル、カナダ、チリ、キューバ、エクアドル、スペイン、アメリカ、グアテマラ、フランス、イタリア、メキシコ、パラグアイ、ペルー、フィリピン、ペルー、エルトリコ、ウルグアイ、ベネズエラ、およびアフリカ東部島嶼地域のラ・ウニオンにもある。
- (4) バスク民族研究会。バランディアランを中心に結成されたこの研究会は、誰でも参加可能ではなく、彼の意志を引き継ぐ研究者から構成される。過去の研究蓄積をよく把握していることが必要であり、また確立されている聞き取り調査法に基づいてフィールドワークが実施されている。スペイン・フランスを問わず消滅寸前の民族資料を収集し、活字にして一般の人々に提示している。
- (5) オリエンタリズムもその一つ。「語る」視点によっては一方的言説で終始される。
- (6) フランコ将軍がとったバスク統治政策は、経済特権の廃止（ビスカヤ県とギプスコア県のみ、アラバ県とナバラ県は内戦中はフランコ側にあったので適用外）、バスク語使用禁止である。つまり地方の価値を認めず、スペイン・ナショナリズムへの統合がはかられた。
渡辺哲郎 渡辺哲郎『バスク もう一つのスペイン —現在・過去・未来』改訂増補版、彩流社、1990、104-112頁。
- (7) Aguirre franco, R., *Enciclopedia ilustrada del País Vasco- Juegos y deportes*, Auñamendi, 1987, Donostia-San Sebastián.
- (8) バスク各村には、ベルソラリという即興詩人が必ず存在していた。優秀なバスク人に対して、その人の過去の業績と現在を結びつける。これがバスクスポーツであれば、過去の名勝負を朗々と詠い、本人がいかに優秀であるかをアピールす

る。もちろん対戦相手も引き連れてきているので、対戦前にはもう一つの戦いがあった。詠い終わった相手の最後の韻を受け継ぎ、それを用いて詠い始める。その判定は大衆が決定する。

Bombin Fernandez,L., Bozas-Urrutia,R., *El gran libro de la pelota* tomo I, Deporte Universal, 1976, Madrid, pp.999-1036.

- (9) Gabriel Aresti(1933-1975), ビスカヤ県ビルバオ市生まれ。詩人。『石と村』(1964), 『バスクの石』(1968), 『石でできたこの村』(1971)の3部作はバスク語作詩に多大な影響を与え、人々を現代社会に対峙させただけでなく、作詩の新たな創造性に寄与した。アレスティの作品は、バスクを変えること、フランコ体制に異を唱えることを目的とした。

1969年バスク語詩の最高峰「ホセ・マリア・イパラギー Jose Maria Iparra guirre」賞を受賞した。

Gabriel Aresti, *Harri eta Herri*, Harria Liburuak, 1979, San Sebastián.

- (10) 松井は英國における前近代スポーツの「名誉の觀念」を歴史的に捉え、初期には「いかなる苦痛や死に直面しても、なお最善を尽くして闘いぬく「男らしさ・勇気・忍耐」ということになる」とし、その後アスレティシズムの中心的役割を担っていくようになると述べている。

松井良明 『近代スポーツの誕生』 講談社 2000年 160-171頁。

- (11) 生きた動物を用いたり、人間が直接行っても、そこに「流血」が生じかつそれが不可欠な娯楽あるいはスポーツの総称である。

前掲書 30-32頁。

- (12) マックランシーはバスク民族スポーツを含めて、バスクにおけるスポーツそのものをナショナリズムとの関係性として捉える。もちろんすべてがナショナリズムに直結するわけではないが、ひとつの視点を提供している。ただ、多様なバスク社会を一元的にみるには限界もある。

MacClancy, J., Nationalism at play : The Basques of Vizcaya and Athletic Bilbao, *Sport, Identity and Ethnicity*, Berg, 1996, Oxford.

- (13) サビーノ・デ・アラナは、バスク民族運動の創始者であり、バスク伝統の危機を訴え、その保護を自ら申し出た。『ビスカヤ・バスク語基礎文法(1888年完成版発行)』や雑誌を発行し、バスクの伝統、カトリック信仰、バスク民族、地方特権などを掲げて政治運動を開始した。このナショナリズム運動は、工業化と外国化(スペイン化)を批判した。渡辺哲郎 『バスク・もう一つのスペイン 一現在・過去・未来』改訂増補版、彩流社、1990, 55-56頁。

- (14) バスクを「エウスカディ」の新造語を用いて民族国家としてとらえ直したサビーノ・デ・アラナの考えには、19世紀末からバスク民族主義がバスク史を記述する際に必ず登場した。この民族史観は神話の強調がなされ、第一次カルリスト戦争敗北(1839)前まで「独立」していたとして、バスク「国家」の独立が主張された。

前掲書, 190-193頁。

- (15) 稲垣は、ギルマイスター仮説を取り上げ、テニス球戯起源論におけるバスク民族のペロタ球戯軽視について批判と反論を試みている。また竹谷は、ギルマイスター仮説が取り扱う最も古いペロタ球戯より300年も古い資料を確認・提示して、その仮説の信憑性に疑問を投げかける。

稻垣正浩「テニス球戯起源論とペロタ球戯（バスク民族）の関係について — H.ギルマイスター仮説批判、その1—」『スポーツ史研究第10号』スポーツ史学会, 1997, 23-40頁。

竹谷和之「テニス球戯史研究とペロタ・バスカ」『神戸外大論叢』第48巻第4号, 神戸市外国語大学研究会, 1997, 47-59頁。

- (16) Equipo Editorial "Kirolak Lur", *Nosotros Los Vascos juegos y deportes I*, lur Argitaletxea, S.A., 1990, p.69.

- (17) このコバルビアス宝典は、マドリッド以南で活躍した神学研究者セバスティアン・デ・コバルビアスが編纂したもので、バスクとの精確な接点は見いだせない。pelotaという用語には多くの形態を含んでおり、ペロタ・バスカの1形態と近似しているものもある。

竹谷和之「大航海時代のスポーツ —コバルビアス宝典(1611)のペロタ球戯—」『神戸外大論叢』第49巻第1号, 神戸市外国語大学研究会, 1998年, 75-96頁。

- (18) Juan Inazio Iztueta (1767-1845) は音楽や舞踊をおもに収集し、自らも演じた。しかしバスク民族スポーツへの関心もあり、ペロタなどの記述も見られる。

- (19) パンプローナ市にある教会古文書室にはまだ未読の書類がある。2人の司書が1988年から始め、毎年その研究の成果を出版している。Archivo Diocesano de Pamplona, C/84-N.17.

- (20) Aguirre Franco, R., *Gure Herria juegos y deportes del pais vasco*, Kriselu, 1989, San Sebastian, pp.38-46.

- (21) エウスカル・エチエア Euskal Etxea (バスクの家) という集会所が、移民の憩いの場所となっている。これはスペインによく見られるグルメ・クラブに近似しており、年会費を支払い、会員は自由に使用することができる。個人的には家族や数人の友人と、また祭などにはここを解放して、行事が行われる。